



### へび年明ける

遅ればせながら、新年明けましておめでとうございます。平成25年はへび年ということで、新年早々たくさんのお客さまにへびをさわりにご来園いただきました。しかし、中には気味悪がるお客様もいて、そういった方には逆に積極的にさわってもらうよう勧誘しました。すると、ほとんどの方が、思ったよりサラサラしていた、という感想を口にします。多くの方がへびに対していやなイメージを持ってられると思いますが、そんな気の毒なへびのため、今回はへびの体の特殊性について紹介したいと思います。（なお、本文は市役所職員向けの庁内広報誌に掲載したものを加筆修正したものです。）



あけましておめでとうございます

へびの負のイメージで一番多いのは、長くて足がないことではないでしょうか（本来は肢と書くべきですが、あえて）。足がないためいくつにも重なった腹板を前にずらしながら左右にくねって進むさまが、他の動物の移動方法と決定的に違うところです。他の動物とのこの違いが「気持ち悪い」、というイメージを人間に植え付けたのだと思います。腹板だけで進むため、ひとつひとつのパーツは少ないより多いほうが進みやすく、体も長くなっていったのでしょう。



約4メートルの長いビルマニシキヘビ（アルビノ）

また、ヘビは同じ爬虫類のトカゲなどから進化したと言われますが、彼らは地中に潜るためあえて足をなくし体を細長くしました。地中や岩のすき間にはネズミなどのげっ歯類や昆虫、ミミズ、モグラなどエサとなる獲物がたくさんいます。また、哺乳類や猛禽類などの捕食者から逃れることもできます。変温動物のヘビにとって、温度変化の少ない地中は逆に天国のような環境だったかもしれません。地中を進むに足は邪魔です。また、地上で音もなく獲物に忍び寄りパクッとやるにも足はないほうが好都合です。こうして退化した足ですが（身体的退化も進化の形態です）、一部のヘビにはその痕跡がわずかにあります。今度動物園に来たらぜひふれあいに出ているビルマニシキヘビのお腹の後方を見せてもらって下さい。小っちゃな爪のような突起が確認できます。



肢の痕跡と腹板

次のキモさは、ヌルヌルしてるという誤ったイメージです。しかし、これも触ってみて下さい。まったく逆でサラサラしています。どうしてもウナギの印象があるからだと思いますが、ウナギの体表面に鱗はなく、両生類同様、皮膚呼吸をする理由から体を保水力に富んだ粘液で覆っています。しかし、爬虫類の中でもヘビやトカゲは有鱗目というグループに分類され、固い鱗で覆われているのです。先ほど進化の話をしました。爬虫類もその祖先は両

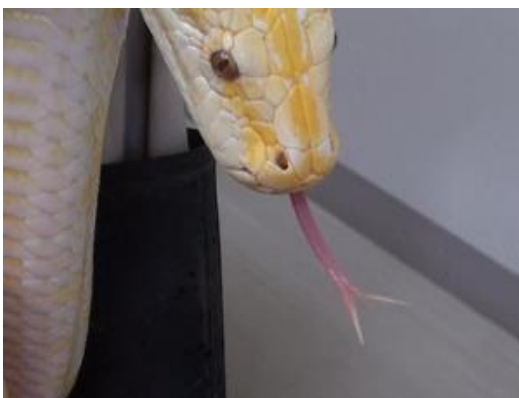


生類から派生したと考えられています。水辺周辺で生活していた両生類は乾燥に気を配ることはありません。しかし、水辺を離れ陸上だけに進出した生き物にとって最大の敵は乾燥です。この乾燥から身を守るため鱗という鎧を身にまといました。この鱗は、私たちの爪と同じケラチンというたんぱく質できています。だからサラサーラのスベスベです。また、ヘビが脱皮するのはご存知の方もいると思いますが、鱗表皮の古い角質層を交換するためヘビは脱皮を繰り返します。私たちもお風呂でアカを落としますが、このアカと同じようにヘビは全身丸ごと交換します。



脱け殻いっぱい：ただいま脱皮中

次に嫌がられるのがチロチロ出す舌。この舌、実は鼻なんです。いや、別に鼻もあります。それとは別に、周囲の臭いの分子を二股に分かれた舌の先からめとり、口の中にあるヤコブソン器官という臭い感知器へこの舌先をつけて嗅覚情報を入手しているのです。もともと鼻の奥にあったこの器官、鼻の穴数にあわせこの器官も二つあることから舌先も二股に分かれたのです。ヤコブソン器官は人間にはありませんが、嗅覚の鋭い犬や一部の両生類にもあります。



二股に分かれた舌先



瞼のない眼とピット（鼻の下）

この他にも、温血動物を捕えるために（基本的に生きたものしか食べない）必要な熱を感知するピット器官の装備や、弱い視力ながらも一瞬たりとも捕食機会を逃さない瞼のない開きっぱなしの眼（実は眼球保護や乾燥防止から透明な鱗に覆われている）など、狙われた獲物には堪ったもんじゃな秘密兵器の数々を引っ提げながら進化してきたわけです。

かみね動物園では、ビルマニシキヘビ（色素の抜けたアルビノ種と通常種）とボールニシ

キヘビを飼育展示しています。冒頭にも書きましたが、ふれあいに出すとお母さんたちから、「いやあ。毒はないの?」と聞かれますが、ニシキヘビに毒はありません。ヘビ全体でも毒をもつものはほんの一部です。ただし、毒はなくても体長4メートルにもなるニシキヘビは強烈な絞め技を持っており、鳥や小型哺乳類、時にはシカなども巻きつけて締め殺すことができます。サラリーマンの格言「長いものには巻かれる」はニシキヘビの前では撤回して下さい。

また、ヘビに耳はありません。前述の熱感知や嗅覚、振動などで聴力を補って余りあるのです。「あいつは聞く耳をもたない」と言ったらそのあいつとはヘビだと思って間違いありません。



おとなしいボールニシキヘビ

このように、「嫌うなら嫌ってくれ、ヘビはヘビのやり方でいくぜ」的進化を遂げてきた彼らからすれば、これ以上合理的な体のつくりは考えられなかったのでしょうか。もしかすると、嫌われる体をつくることで人間や他の動物が忌避するような巧妙な戦略だったのかもしれない。

私の母の実家は田舎の農家で、子どもの頃泊まりにいった遊んでいると押入れから突然アオダイショウが現れ、子どもたちでキャアキャアやって騒いでたのを思い出します。しかし伯父さんは、家の主だから退治しないんだ、と言ってました。あとで聞くと天井裏のネズミなどを退治してくれたり他のヘビが来ないから、ということでしたが実際はニワトリを放し飼いにしていたので、卵やヒヨコがやられていました。なんともどかな光景ですが、今は滅多に日常の中でヘビがでてくることは無くなりました。

そんなヘビさんも時には重宝されます。特にアルビノのニシキヘビは黄金色に輝き、お客様は脱け殻のお守りグッズを金運上昇として買って行かれます（上昇しないこともあるようです）。また、ヘビが夢にでてくると縁起がいい、などともいわれます。

動物園ではヘビとの触れあいを毎日やっています。どうか平成25年が皆様にとって良い年となり、またヘビの悪いイメージが払しょくできますよう、どうぞ思う存分触れあって下さい（ただし、ヘビに嫌われたらヘビ以下、ということ）。



仲良くなりましょう

(補足)

ヘビはトカゲから進化して足がない、と書きましたが例外もあり、まんまな名前をいただいたアシナシトカゲのように足がないトカゲもあります。(じゃ、ヘビだろ、って突っ込まないでください。鱗はあるしトカゲの得意技しっぽ切り—自切もできるんです)

## 参考文献

「世界動物大図鑑」(デヴィッド・バーニー・編)  
「両生類・爬虫類のふしぎ」(星野一三雄・著)

2013年1月12日

---

## 過去の一覧

[令和6年](#)

[令和5年](#)

[令和4年](#)

[令和3年](#)

[令和2年](#)